

都会育ちの青年の夢

にっ た ひろ み
新 田 博 美

1997年7月上旬、神奈川県藤沢市に住み東京の大学に通うN君に出逢ったのは、私が鳥取県の友人宅をたずねての帰りのことだった。煮えたぎるようなアスファルトの舗道を、リュックサックを背負いサンダル履きで歩く、いかにも貧乏学生の様子を、車で通りすぎた私は、バックミラーに映るうつむきかげんの姿に、なぜか思わずブレーキを踏んでしまった。助手席に座った彼が言った。「これから広島の実験資料館を訪ねて、それから神戸の震災のボランティアに行くところです。」

そんな彼に、今頃の若者にはない何かを感じ、無理矢理3、4日と私の家に泊めてしまった。その後、彼は春休み、夏休み、そして農繁期になると、電話をよこし、農作業の手伝いに来る。今年もまた田植えシーズンの手伝いに来た。

「新田さん、僕も4回生になり就職活動に忙しい時期ですが、僕の進路は決まりました」と、彼は田植の休息時につぶやいた。「3年間ここにおじゃましましたが、物を作る大切さ、自然の重要性、そして本当の自分の進む道は

何かを感じ、卒業後はここで農業をめざします。」

言われた私の方が「君が農業をするのか」と驚きながらも、彼の本気さと、農業に対する想いを痛感し、隣の町で農地と空き家を探し、数日前(6月)彼の希望に近い家と農地を見つけることが出来た。

過疎地域で生産性も低く、後継者がいても他産業に就き、さびれる一方の山村を、新しい感性で守り続けてくれるのは、案外、彼のような非農家のやる気のある若者なのかも知れない。

農業の危機的状況が深刻化しているが、農業は国民の暮らしや、命にかかわるものである。国土保全や環境面で、中山間地域の農業が果たす役割は、まだまだ大きい。新農業基本法が成立しつつある中、山村の良さを見出し、守ってくれるのは、農村育ちの若者でなく、N君のような都会育ちの若者なのかも知れない。

彼に対してできる限りのバックアップをしながら、この夏もリュックを背負っている若者を見かけたら、無理矢理でも私の助手席に乗せてみよう。そういう意味で私にとっては最高の喜ばしい田植えシーズンが終わろうとしている。

(岡山県作東町・農業)